
ヴァンパイア物語

水無月 皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイア物語

【Nコード】

N6940K

【作者名】

水無月 皐月

【あらすじ】

東宮財閥の長女・東宮樹里。

彼女の幼馴染であり、ヴァンパイアハンター・黒主潤とヴァンパイアの頂点・玖蘭悠は彼女に恋をしてしまう。

《更新停止します。》

第一夜　猥がある学校

「はあゝ。夜間クラスがよかったのに。」

寮から校舎に行く途中の道で東宮樹里は、ぼやいた。
樹里は、夜の方が頭がさえるのだ。

「はあゝゝゝ。」

と、その時。木が、ものすごい勢いで倒れてきた。
刹那。樹里の後ろから、すつとてがのびてきた。
樹里は、一瞬何があつたのかわからなかった。

「大丈夫かい？」

後ろから、艶やかな声が聴こえた。
樹里が後を振り向くと、サラサラの髪、凜と整ってどこか甘い、
憂いを秘めた眼差しの、すらりと均整の取れた体つきの――
吸い寄せられそうなほどの美貌の主がそこにいた。
樹里は、火照りかえるように紅く染まった。

「どうかした？気分でも悪いの？」

樹里の頬が紅くなつたのを見て彼が聞いてきた。

「だ、大丈夫です。」

「そう、よかった。君、名前は？」

「東宮の事なら、黒主が知っているんじゃないんですか？」

クラスの全員が、頷いた。

一人を除いて。

その一人が、黒主潤。

樹里の幼馴染だ。

二人は、ほとんど一緒にいる。

そのため、樹里に近ずけるものはいない。
なぜかって？

彼は、カッコイイのだが怖い。彼に近ずいた物もいただろう。
しかし、無愛想なうえあまり喋らない。

その圧迫感に耐え切れず、皆逃げてしまうのだ。

唯一近づけるのが、樹里。

「黒主、東宮はどうした。」

潤は、立ち上がり教室を後にした。

（樹里が、心配だ。）

樹里は、目を覚ました。

寝ているのはシーツの上で、見たこともないベットだ。

「悠様、なぜ人間をつれてきたのですか。しかも、見ず知らずの人間を。」

隣の部屋から声が聴こえてきた。

（たぶん、悠先輩は隣の部屋にいるんだ。）

「君に指図されるつもりはないね。海斗。」

「しかし、」

「さがれ。」

「……わかりました。」

（彼らは人間ではないのかしら……）

樹里は、ふとそう思った。

（私、何考えているの……。助けてもらったのに……）

と、考えていると隣の部屋へ続くドアが開いた。

樹里は、驚いて跳ね上がった。

「やあ。起きたのかい。」

微笑みながらそう言った。

樹里の頬が少し赤くなる。

「助けて頂いて、ありがとうございました。」

「いいんだよ。さあ、そろそろ帰らないと皆心配するよ。」

樹里は、あわてた。

「それじゃあ、お世話になりました。」

ペコリと礼をすると、悠が

「送って行くよ。」

と微笑みながら言う。

「え、じゃあ玄関まで……」

寮の、玄関まで送ってもらうと樹里は、急いで校舎まで走った。

「樹里！」

と、潤の声。

潤は、肩で息をしながら近づいてきた。

「潤！どうかしたの？」

「どうかした、じゃないだろ」

「どうして？」

「どうしてって……。もう、夕方だぞ。」

樹里は、空を見た。

さっきまで、青かった空が赤く染まっている。

「あら、本当。」

「はあゝ」

「ご……ごめん……」

樹里が潤んだ瞳で、潤を上目づかいで見た。
潤の、頬がわずかに赤くなった。
そのことに、樹里は気づかなかった。

「悠様、あの様なことはおやめ下さい。」

茶髪に、青い瞳の（悠には劣るが）イケメンが言った。

「悠様、将星様がお呼びです。」

「ああ、すぐに行く伝えておいてくれ。睡蓮。」

「御意」

「悠様！ヴァンパイアの掟を破るのですか。」

「僕がいつ、血を吸うと言った。」

「……………」

「海斗」

「・・・言っておりません・・・」

「下がれ。」

悠が言うつと、海斗は下がった。

「彼女を好きになるのは罪なのだろうか・・・」

彼の瞳が揺れた・・・

第二夜　ヴァンパイアと政府

コツコツと靴の音が長い廊下に響く。

廊下の先に大きな重厚しい扉があった。

扉を開けると、部屋の真ん中に机がある。

その机の椅子に誰か座っている。

「やつと来たか。待ちくたびれたぞ。」

「すみません。」

部屋全体に、艶やかな声と威厳のある声が響く。

「何の御用でしょうか。」

「まあ、そんなに慌てるな悠。」

そう言い、彼は悠を近くにあるソファーに座るように顎でうながす。

悠がソファーに座ると同時に彼がいう。

「まあ、大した事じゃない。」

「その「大した事じゃない」、というのは？」

「政府が対談を持ちかけてきたというだけだ。」

「大事な事じゃないですか。」

悠が言った時、誰かが扉を叩いた。

「将星様、お連れしました。」

そう言い、扉を開いた。

メイドが誰かを背負っている。女だろう。

「ソファーに寝かせる。」

将星がそう言うと、メイドが女をソファーに寝かせる。
彼女を見て悠は驚いた。

その女は、樹里だったのだ。

「なぜ、樹里がここに・・・」

「わたしが連れてきてもらった。」

将星が、そう言うと悠が彼を睨んだ。

「なぜ、彼女を連れてきたのですか。」

悠が、少し強めにハッキリと言った。

「なぜって・・・お前が人間の女の子を助けたと聞いたから会ってみたいくて。」

悠は、将星をさらに睨む。

「あなたに、彼女を攫う権利があるんですか。」

厳しく言う。

「安心しろ。ちゃんと、元に戻すから。」

「そう言う問題じゃ・・・。」

「何だ、父親を信用できないのか？」

「・・・。」

将星は微笑む。その笑みは、悠にそっくりだ。

「それにしても、誰かに似ている。」

「ええ。」

悠も同意する。

将星は、机の上にあるベルを鳴らした。
部屋の扉の向こうから声が聴こえる。

「将星様、お呼びでしょうか。」

「ああ。彼女の、東宮樹里の事を調べてくれ。」

「御意」

足音が、遠くなる。

「で、お前は何故彼女を助けた。」

「・・・・・・・・」

「まあいいとして、どうするんだ。」

「何をですか。」

「政府との対談だよ。」

将星は、そう言いながら紅茶をすする。

「受けたらどうです？」

そう言い、悠は部屋を後にした。

樹里を連れて。

樹里は、目を覚ますと寮の自分の部屋にいた。

「あれ、私……。」

（いつ、ベットに……？まあいいか。）

そう思いつつ、また布団の中に入る。

樹里はあっと言う間に寝てしまった。

第三夜　樹里の過去

樹里は、東宮家の本当の子供ではない。
あれは、十一年前・・・

「どうしてあんな子を養子にしたの！」

女の怒鳴り声。

「今更何なんだよ！」

こちらも怒鳴り声。

「あなたが選んだんでしょ！」

女の怒りは、頂点に達しているようだ。

（お母様？お父様？）

樹里は、二人のやり取りを聞いていた。

「仕方がないだろう！」

「言い訳ばかり。どうしてもそうなの！」

怒鳴り声は、だんだん大きくなっていく。

樹里はこつそりと、声のする部屋をドアの隙間から覗く。
樹里の母親、否、義理の母親は怒りで顔を歪めている。
一方、義理の父親は、妻よりも歪んでいる。

（何のお話？）

疑問に思う。

「あんな子、捨ててきて！」

先ほどよりも、強く大きく言う。

「早く、樹里を捨ててきて！」

樹里はようやく、話の主旨が分かった。
わかった途端、命の危険を感じ無我夢中で走った。

「どうかしたの？」

少年の声が聞える。

「あなたに関係ないじゃない・・・」

その声は、とても暗い。

「へ〜。」

素っ気無い態度。

「あなたこそ、どうしてここにいるの。」

「君に関係ないじゃん。」

「なっ」

樹里と同じ言葉を返してきて腹がたった。
下を向いていた顔を少年の方に向ける。

そこにいたのは、シルバーグレイの髪に浅紫の瞳の整った顔立ちの少年。

ハッキリ言って、カッコいい。

「どうかした？」

樹里は首を振る。

「ねえ、私のお友達になってくれる？」

「うん」

そう言い、彼は微笑む。

「私の名前は、東宮樹里。樹里って呼んで。」

「僕は、黒主潤。」

「潤・・・いい名前ね。これからよろしくね。」

微笑みながら言う。

その笑みは、誰が見ても見惚れてしまう笑顔だった。
潤は思わず、頬を赤くする。

樹里は首をかしげる。

この日以来、彼女・・・樹里は強くなった。
彼と出会ってから。

第四夜　ヴァンパイアの存在

気がつく、ベットの上。

そして、記憶がない。

これで二回目。

「病気・・・？」

と、呟くと、誰かがドアを叩く。

「樹里。起きてるか。」

ドアの向こうから声が聞える。

この声は潤だ。

「うん。入っていいよ。」

そう言うと、ドアが開く。

それと、同時に樹里がベットから降りる。

潤は、入ってくるなり顔を赤くした。

樹里は、首をかしげた。

「どうかしたの？」

問う。が、潤はさらに顔を赤くする。

「樹里・・・・・・・・」

「？」

樹里はますます首をかしげる。

「服穿いて。」

言われて、初めて気づく。

樹里は、下着しか身につけてない。
両方とも、水色だ。

「ああ。」

急いで、タンスから服を出す。

（あれ？これって昨日も着けてたから・・・）

そう思い、下着を取ろうとした。

すると、その様子を見ていた潤がそれを止めた。

「何してるんだよ。」

「何って・・・これを、取ろうと・・・」

樹里は、下着を見ながら言った。

「あのな、俺は男だぞ。」

「それで？」

「それでって・・・襲ってもいいのか。」

「襲うって？そんなことするの？」

「はぁ~~~~~」

潤は長い溜息をした。

「もういいよ。部屋の外で待ってるから。」

潤が部屋を出ると、樹里は身支度を始めた。

十分後

「潤、入っていいよ。」

樹里が言うと、潤が部屋に入る。

樹里は、真っ白なワンピースを着ている。
と、突然放送がかった。

『生徒の皆さん、ただちに体育館に来てください。』

樹里と潤は、顔を見合わせた。

「行こっか。」

樹里は、微笑みながら言う。

「ああ」

潤は、無愛想に言った。
不機嫌そうだ。

全校生徒が体育館に集まった。
もちろん、夜間クラスはいない。
理事長が、マイクを持って喋り始めた。

『今回、皆さんに集まってもらったのは校内で事件があったからです。』

周りがざわつく。

理事長が、空咳をすると静まった。

『生徒の一人が死亡しました。』

『犯人が、まだ校内にいるかもしれないので必要以上に外出しないように。以上。』

樹里は、周りを見て不思議に思った。

（なぜ、夜間クラスの人が一人もないのかしら・・・）

その夜

樹里は、ベットのの上にいた。
が、中々寝付けない。
ベットから降りると、何故か窓の外を見る。

「!!」

樹里は、驚いた。

窓の外に、男と女子生徒が抱き合っているではないか。
いや、よく見ると男が女子生徒の首に噛みついていて
血が、流れている。

樹里の胸が、ざわついた。

何故だろう、こんなに離れているのに血の匂いにする。
血の匂いを嗅ぐと、くらくらする。

男が、女子生徒の首から口を離す。

樹里は、さらに驚いた。

男の口元に、二本の鋭い牙が生えているではないか。
女子生徒は崩れ落ちた。

樹里は、思わず後ずさった。

どう考えてもヴァンパイアだ。

「樹里、いるか。」

と、潤の声。

樹里は、急いでドアを開けた。
潤は、不思議そうだ。

「潤、来て。」

樹里は、潤を連れて窓の外を見た。
ヴァンパイアが、女子生徒の首筋に残っていた血を舐めている。

「ヴァンパイアめ・・・」

潤が、呟く。

呟くと、窓を開けた。

ヴァンパイアがこちらを向く。

潤は、胸ポケットから銃を出した。

潤が、銃の引き金を引こうとした。

と、同時にヴァンパイアが逃げた。

「くそつ。樹里、ここで待っててくれ。」

そう言うのと、部屋を出てヴァンパイアを追った。

「なんで？何で潤は、あれが人じゃないって判るの？」

そう呟くと、また耳鳴りがした。

そして、頭の中に声が響く。

（ヴァンパイアも、ハンターも信じるな・・・信じるな。）

（ハンターって何？）

頭の中で問う。

（あなたも見たでしょ・・・あれは、ハンター。ヴァンパイアを

狩るもの。
)

(じゃあ潤は・・・)

第五夜　彼の正体

昨夜、ヴァンパイアが架空の者ではないと知った。
実在していた。

潤は、帰ってこなかった。

潤は、ハンター。

ハンターは、ヴァンパイアを狩る者。

ヴァンパイアは、血を吸う獣。

ヴァンパイアは、夜行性。

日の光に弱い。

（夜間クラスは、ヴァンパイアのクラスかも……。）

と、樹里は思った。

血を吸われた女子生徒は別の人が発見し、運ばれた。
きつと、死んでいる。

部屋には、昨日の血の香りが残っている。

血の香りを嗅ぐと、クラクラする。

何故だろう。

ヴァンパイアはきつと、離れていても匂いがするだろう。

（悠先輩も……）

「潤、大丈夫かな？」

もう朝だ。

帰ってきてもおかしくない。

「血、美味しいのかな？」

「潤、早く帰ってきて。」

ドアが、突然開く。

「だ、れ？」

暗闇で、姿が見えない。
唸り声が聞えてくる。

「潤じゃ、ないよね・・・」

焦った。

もしヴァンパイアだったら。

樹里は、後ずさりした。

月明かりで、相手の姿が見えてきた。

男だ。否、ヴァンパイアだ。

口元で、鋭い牙が光っている。

「何の用・・・？」

問う。が、答えはない。

ヴァンパイアが、樹里にとびかかろうとした。
刹那、ヴァンパイアが砂になった。

「！」

樹里は驚いた。

「だ、れ？」

「大丈夫かい？」

「悠先輩。」

ヴァンパイアを、砂にしたのは悠のようだ。
悠はにっこりと微笑む。

「大丈夫です。」

樹里も、つられて微笑む。

が、彼の口元にある牙を見てその笑みは消える。

「先輩も、ヴァンパイア何ですか？」

「ああ、そうだよ。」

質問をしても、その笑みは崩れない。

「君が、見たのもヴァンパイア。」

「先輩は、血を吸わないんですか？」

「掟だからね。」

「掟？でも・・・」

「こいつは、掟に背いた。だから消した。」

しばらく沈黙が続く。

「そろそろ彼が来るね。」

そう言い悠は、立ち上がった。

「またね。」

そう言い残して部屋を出た。

少しして、足音が聞えてきた。

足音の正体は、潤だ。

「潤・・・。お帰り。」

微笑みながら言う。

「ああ。」

不機嫌だ。

「どうかした？」

「やり損ねた。」

「ヴァンパイアのこと？」

「うん。」

「それならそこに・・・」

樹里が、砂を指差す。

「来たのか・・・」

「ねえヴァンパイの事話してくれる？」

「ああ」

ヴァンパイアの事は、昔はみんなが知っていた。

だが、だんだんヴァンパイアは人前に出なくなった。

人々は、ヴァンパイアがいなくなったと思った。

ヴァンパイアは、次第に忘れられていった。

だが、忘れてない奴もいた。

そいつらは、ヴァンパイアが人を襲うかもしれないと恐れ、

ヴァンパイアハンター協会』を作った。

しかし、最近になってヴァンパイアが政府に手紙を送った。

政府は驚いた。

手紙の内容は、ヴァンパイアと人間の共存だった。
その事は極秘となった。

人々の混乱を避けるためだ。

その事は、政府のごく一部と協会に知らされた。

政府は学校を建てた。

そこでヴァンパイアに、人間の事を勉強してもらったためだ。
その学校が『帝国学校』だ。

政府は、ヴァンパイアと約束をした。

「1・人の血を吸わない。

2・人に危害を加えない。」

この二つだ。

中には、これを守らないヴァンパイアが出てきた。

ハンターはそれを狩る。

掟を守れない奴は、死。

それだけだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6940k/>

ヴァンパイア物語

2011年10月7日00時30分発行